

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「朝鮮半島の文化」展示の改造計画

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002178

第5章

「朝鮮半島の文化」展示の改造計画

朝倉 敏夫

1. はじめに

本稿は、国立民族学博物館の常設展示場にある「朝鮮半島の文化」展示を展示替えるにあたり、どのような展示技法を思索し実践したかを中心に報告することを目的とする。しかし、このことは展示のプリンシプルや構成とも密接な関係があるので、展示替えの全体的経緯の概略もあわせて報告しておくことにする。

2. 共同研究会の立ちあげ

「朝鮮半島の文化」展示プロジェクトチームは、朝倉と重松の2名しかおらず、平成9年度から「『もの』を通して見た朝鮮民俗文化」というタイトルで共同研究会を組織し、日本各地の大学、美術館において韓国文化を研究している人々に参加していただき、研究発表と同時に、それぞれの分担項目に関し収集・展示に関するアイデアを出してもらうことにした（表1）¹⁾。また、平成10年12月から客員助教授として韓国国立民俗博物館の金時徳学芸士を招請し、展示に関するアドバイスを受けることとした。

3. 新しい展示のプリンシプル

朝鮮半島の文化展示は、昭和58年3月に第8展示場が竣工され、同年11月に一般公開された。当時のプロジェクト・リーダーである祖父江孝男は、「この地域の展示の基本プリンシプルとしては、現代の韓国の精神生活における二つの基本的な枠組となっている『民間信仰』と『儒教』の二つを大きな柱とし、それらの間に衣食住の物質文化を配列して、韓国の文化の構造を示すようにつとめた」[祖父江1984:299]と述べている。その展示構成は、民間信仰、芸能、食生活、住生活、衣生活、儒教からなっており、展示コーナーは図のようである（図1）。

さて、新しい展示のプリンスプルは、民博における常設展の展示替えの全体的方向を見据えて、以下の3つの基本的な認識に立脚して考えることにした。

(1)現代文化の展示：今回の展示替えは、第7展示場の開設にともない、南アジアが新設され、東南アジアがリニューアルされたのに引き続いて行われる。南アジア、東南アジア展示から、これまで不文律であったプラスチック以前の伝統的社会における文化の展示から現代文化を視野に入れた展示への転換があり、朝鮮半島の文化展示においても現代文化の展示を念頭におく。

(2)既存の展示の最大限活用：予算の問題を含めて、既存の展示資料およびすでに民博に収蔵されている標本資料を最大限活用することで、新規に収集する標本資料をできるだけ少なくする。

(3)パティオの利用：パティオはこれまで朝鮮半島の文化展示の一部として文人像とトルハルバンの展示に利用されてきており、今後も継続して朝鮮半島の文化展示の場として利用させてもらう。

こうした基本認識をもとに、それぞれより具体的にどのような展示にすべきかを考察した。

(1)朝鮮半島の文化は五千年の歴史をもつといわれ、巫俗文化を基層文化とし、仏教文化、儒教文化、キリスト教文化、そして日本の植民地文化と、外来文化が時代の流れの中で受容され形成されてきた。そして韓国社会の現代文化は、これら諸々の文化伝統が一種のシンクレティスティックな状況で、そのなかからある種の正統性を付与される対象として、儒教の文化伝統なり、仏教の文化伝統なり、あるいは巫俗や民俗文化の伝統というものが再構成されている。換言すれば、「伝統」を過去の残滓ではなく、現在の時点で活動中の文化的な力として、「意味ある過去」と規定すると、「伝統」こそが韓国社会の現代文化ということになる。

こうした文化の展示にあたっては、これら諸々の文化伝統を疑似歴史的な区分で展示するよりも、諸々の文化伝統が共時的な次元でいかなる形で併存し相互作用しあっているか確認できる展示が望ましいという意見が出されたが、一つ一つの文化伝統をコーナー別に分けて展示するほうが、小中学生には朝鮮半島の文化の多重性が理解しやすくなる。と同時に、コーナー別に分けて展示することで、例えば朝鮮半島での仏教文化を南アジア、東南アジアの仏教と比較してみるというように、ある文化項目を他地域の展示との比較の視点でみることもできるようになると考え

た。

そこで展示の配列は、展示場に入って向かって左壁に、まずイントロダクションとして韓国文化を象徴する展示と海外のコリアンを展示する。ついで現代文化、そして植民地時代の文化、キリスト教文化、儒教文化、仏教文化と、外来文化の伝来の順に時代を遡るように配列し、最も奥に基層文化である巫俗文化を展示していくことにした。

こうした展示配列により、朝鮮半島における歴史文化を辿ると同時に、現代韓国文化の多重性を知ることができるのではないかと考えた。

(2)農楽、生産用具、婚礼、チャンスン・ソッテ、食生活、調度品（一部）、仮面劇、平生図、祭祀床などは、既存の展示をそのまま活かすことにする。ただし、その位置は展示内容が関連するものを近くに配置するように移動させる。

中央空間部の前部には衣食住を中心に人々の暮らしを展示することとし、まず住文化の一つとして済州島民家模型を移設し、そこから右前方にあるパティオに伝統的社会的居酒屋である酒幕を建てる。酒幕にあるパティオへの入り口にチャンスン・ソッテを立て、村への入り口を表す。そして、生活文化の中心をなす食文化の展示を配置する。食文化は、従来の生産用具の展示と食文化の展示を一部修正するが、ほぼそのまま残す。中央空間部の後部には衣文化とするが、トル、婚礼に加えて、これまでなかった喪礼（葬礼）に関する資料を配置し、儀礼服を中心にした展示にする。また、平生図も人生儀礼と関連するので衣文化に分類した。

右壁面の展示は、左壁面の展示と関連の深いものを向かい合わせに対応させ、例えば儒教の教えを体現する両班の人生の理想を描いた平生図は儒教文化の向かいに、両班や僧を風刺した仮面劇は儒教文化と仏教文化の向かいに、巫楽器と同様の楽器を使う農楽は巫俗文化の右隣に移動させる。

(3)パティオは、参加型、体験型の展示にとって有用な空間となりうるし、休憩所として利用することもできる。例えば、子どもの遊び、楽器演奏などができる、オンドルの暖かさを体感する、朝鮮半島の文化についてディスカッションできる、などの多様な機能をもたせることができる空間にする。

以上、今回の展示の基本的構成は、朝鮮半島の歴史文化と現代韓国文化の多重性をキー・テーマとした「歴史と文化」、「衣文化」、「食文化」、「住文化」、および「芸能」の五つに大分類した。

4. 収集方針

上記のような新しい展示についての基本認識をもって、共同研究員から収集すべき標本を以下の13の項目に分けて、どのような資料を収集したらよいかについて、できるだけ具体的な品目を書いてもらうように依頼し、アンケート形式で答えてもらった。13項目は、1.衣、2.食、3.住、4.生産用具、5.日用雑貨、6.人生儀礼、7.歳時風俗、8.宗教・信仰、8-1.キリスト教文化、8-2.儒教文化、8-3.仏教文化、8-4.巫俗文化、8-5.その他、9.芸能、10.都市文化、11.日本の植民地文化、12.海外のコリアン、13.その他 である。

アンケートに記載された内容を整理し、収集すべき標本のリストを作成し、共同研究員に提示した。この時、11.の日本の植民地文化というコーナーは、ぜひ展示を実現させたいが、議論すべき点も多く、韓国における日本文化というコーナー名に変更した方がよいとの意見が出された。

アンケートであげられた収集すべき標本のリストはここでは省略するが、ここで議論された収集方針をもとに、平成9・10年度の予算により、これまで未収集であった、巫俗文化のクッ、仏教文化、キリスト教文化、人生儀礼のうち喪礼（葬礼）、酒幕関係の標本を重点的に収集した。

5. 展示設計

収集後、ほぼ当初の展示構想に準拠するものの、展示コーナーのうち「海外のコリアン」と「韓国における日本文化」を「伝統工芸」と「スポーツ文化」に変更した（図2・表2²⁾）。

既存の展示を活用し、あまり大規模な展示替えにならないようにという方針ではあったが、模様替えをしたということがはっきりと分かるような展示となるよう腐心した。そのための目玉は二つあると考えた。

一つは、済州島民家模型の移動である。この済州島民家模型は大阪に済州島出身者が多く居住することから製作展示されたが、展示が中央部に位置することによって、韓国人からは「済州島民家は韓国の民家を代表するものではない」と強い抗議をうけたこともあった。そこで生態学的条件の類似する沖縄の民家模型との比較を容易にさせるとともに、済州島の地理的な位置感覚をもたせるために、日本展示の沖縄の民家模型に近い入り口部に移動させた。このことにより、休憩所から朝鮮半

島文化の展示への誘導が明確になるとともに、民家模型の上部に設置された照明装置が撤去され、中央部の障害物がなくなり入り口部から最奥部まで見通しがよくなるという副次的効果を得ることができた。

二つは、パティオでの展示である。パティオに関しては『展示の基本構想』に「各展示場の中心には一辺20mのパティオを設ける。これは、展示場内に必要な、やわらかい光を得るだけでなく、象徴的空間あるいは必要に応じて野外展示のための空間としても有効に利用する。さらに、将来はこの展示パティオに屋根を設け、一般市民がここで諸民族の生活様式の一端を実際に体験するというようなこともできるよう配慮する」〔国立民族学博物館 1982:11〕とある。

そこでパティオの中に入り生活様式の一端を実際に体験できる展示物として酒幕を選択した。酒幕とは、路傍で酒食を売り、客を泊める家であり、伝統社会において旅人にとってなくてはならない休息の場であった。旅人のみならず、行商をして歩く樵負商たち、科挙（官吏の採用試験）を受けに行く人、それに落ちて帰る人、酒幕はそれらの人々の情報交換の場であるとともに、人生の喜怒哀楽を知る場でもあった。この酒幕を展示することで、伝統社会の生活様式の一端を体験してもらうとともに、中央集権体制下での固定した社会というイメージで捉えられがちな朝鮮の伝統社会における移動する人々の存在を考えてもらうきっかけを作るというねらいもある。

かつての酒幕そのままの姿は、現在の韓国社会からは姿を消しつつあるが、何カ所の酒幕の調査の結果、韓国民俗博物館元館長である孟仁在先生の諮問を受け、忠清道のある酒幕を再現展示することにした。

6. 展示技法

展示技法についてはことさらに新しく開発したものはない。しいて言えば、古くて新しい展示を目指したといえるかもしれない。

みんなく電子ガイド」の活用

『展示の基本構想』に「本館の展示においては、原則として一つ一つの標本資料を個別に説明するのではなく、標本資料を通して、その背後にある文化を語らしめるために、それぞれの文化をセットとして説明プレートをつけるものとし、個々の標本資料には名前プレートをつけて処理せんものとする」〔国立民族学博物館

1982:68]とあるように、民博の展示は「もの」との対話を重視してきた。これに対し来館者からより詳しい標本資料の解説を求める声があった。

今回の展示においては、ことに基本コンセプトにもとづく展示物の配置の説明をはじめ、コーナーごとの文化的背景の解説の必要性を強く感じているものの、あえて展示場にマルチ・メディアなどの機器はおかず、グラフィックも極力少なくすることにした。これはあくまでも「もの」との対話という基本的な姿勢をたもちたいということと同時に、1999年5月13日から展示場において利用されている「みんなく電子ガイド」を積極的に活用したいと考えたからである。

「みんなく電子ガイド」は、「専門家による案内を電子機器で実現しようと開発された携帯端末で、来館者がこの携帯端末を持って展示品の前に立つと、その端末にそれぞれの展示品の解説が、文字情報、静止画、動画、音響情報で現れるという装置である」[栗田 1999:44]。

新展示場のオープンに先駆けて既存の展示場で「みんなく電子ガイド」が公開されるため、新展示に移行される「儒教祭祀」「トル」「婚礼」「チャンスン・ソッテ」「仮面劇」「農楽」「済州島民家」「食文化」「平生図」など12の展示についてのコンテンツを作成した。現在、新展示への移行に向けて、各コーナーごとの文化的背景、個々の展示品の解説など、「みんなく電子ガイド」のコンテンツを約20ほど作成中である。

コンテンツの作成にあたっては、1)コーナーの文化的背景から個々の展示品へという見方ができるよう、各コーナーを説明するコンテンツを各コーナーに一つは作成する、2)その逆の見方も可能になるように、各コーナーの説明と個々の展示品の説明との間に相互関係をもたせて作成する、3)個々の展示品の説明は、あたかも「ドクターみんなく」が展示場にあるという形で作成する、4)「ビデオテーク」でさらに詳しい解説を知りたくなるように作成する、という方針をたてた。

3)の「ドクターみんなく」が展示場にあるようにというのは、「ドクターみんなく」で検索できる標本は、あまり大きくないもの、希少価値の高くないものという条件がつく。展示場においては、そうした条件なしに、すべての標本についての解説が可能であるからである。また、4)の「ビデオテーク」についても、既存の16本に加え、嶋陸奥彦（東北大）・劉明基（慶北大応）両教授の協力で儒教式の祖先祭祀に関し2本、映像作家の金英煥氏の協力で巫俗に関し2本、野辺送り、古希祝

い、各1本、計5本のコンテンツを新たに作成したが、さらに多くのコンテンツを作成していかなければならない。

「みんなく電子ガイド」に全面的に解説を依拠することに問題がないわけではない。それはその利用状況との関係である。「みんなく電子ガイド」を利用しない来館者には、他に解説がほとんどないため、わかりにくい展示になってしまう。したがって、その利用を促進する手だてを講じなければならない。とりあえずは「みんなく電子ガイド」を利用してもらえるようにパネルでの表示を行うが、基本的には来館者の期待にそうようにコンテンツを質・量ともに充実させることが何よりも大切であろう。

「対話」の場

酒幕は、朝鮮の伝統社会において、今日の飲み屋の機能、食堂、旅館の機能を兼ねたものであったが、いろいろな情報を伝えたりキャッチしたりするニュースセンターの役割をし、さらには人々が集まって簡単な余興を楽しむことのできる娯楽の場であり、いろいろな階層の人々が集まっては散らばる所であったため文化を伝達する場所としての役割もはたしていた。

酒幕を展示することで、こうした酒幕の機能をすべてもたせることができればよいと考えた。酒幕でのイベントを通して、ここを単に休憩できる所としてのみ利用するのではなく、「対話の場」として活用することができる。

酒幕の展示はこうした利点をもつものの、実際に建てるには問題がないわけではない。

一つは展示物として酒幕を見た時、酒幕の本来の雰囲気醸し出すためには草葺き屋根でなければならない。しかし、草葺きにした場合、何年かに一度葺き替えをしなければならず、防虫処理などもほどこさなければならない。草葺きはやむをえず断念したが、瓦やスレート屋根では、酒幕の雰囲気がでないばかりか、酒幕がそうしたものであるかという誤解を生じかねない。アクリル、ガラス張りなども検討したが、銅板により実際の草葺きに近く、耐久性の高いものにした。

二つは、パティオに建てるための問題である。パティオの防水工事、排水工事を完成させてから建てなければならない。また、パティオに来館者が入るためには、館内展示場にある資料保存の問題から二重扉を設置し、非常時の来館者誘導のため非常出口を二カ所設置しなければならない。さらに身体障害者が車椅子に乗って見

学できるようにするには、スロープ、手すりなどの設置が必要である。

体感展示

こうしたさまざまな問題も関係各位の理解と努力のおかげをもって解決され、パティオでの酒幕の展示が可能になった。

これによって酒幕で、朝鮮半島を旅する人の気分を味わい、オンドルの暖かさを体感できるようになる。パティオの空間において、たとえば農楽の楽器を演奏したり（騒音の試験をしてみなければならないが）、農楽隊の帽子をかぶって帽子につく尾をまわしてみたり、子どもの遊びを実演してみるなど、参加・体験型の展示も可能になった。

このほか、巫俗文化のコーナーにおいて実際に巫堂による告祀を実演することも考えている。また、キリスト教文化の聖書、現代文化の漫画などは、できれば手にとって読むことができるようにしたいが、これは検討中である。

7. 今後の課題

今回の展示構想のなかで実現できなかったことを今後の課題としてあげておきたい。

一つは、済州島民家模型を沖縄の民家模型の近くに移設したが、「日本の文化」展示プロジェクトと協議することで、この二つの模型の間にある「南島文化」のコーナーと連続させた「海の文化」の展示が可能になる。たとえば海女の習俗や筏などの在来船の展示は、朝鮮半島と日本、あるいは中国にまたがる共通点と相違点を明らかにしてくれよう。

「朝鮮半島の文化」展示の立場からは、半島は海から大陸への橋渡しの位置にあり、この「海の文化」の展示ができれば、生産用具の展示コーナーに火田民の文化、高麗人参など薬草、狩猟といった「山の文化」に焦点をあてた展示が可能になる。

もう一つは、「韓国における日本文化」と「海外のコリアン」のコーナーである。前者は、植民地時代の文化が中心になる。民博の展示としては、植民地支配の功罪を問おうとするものではなく、生活文化を通して、この時代を考察できるような展示が望ましいと考える。写真展示は可能だが、「もの」でいかに展示するか、陶磁器、農具、船などには日本の植民地時代に影響を受けたものがあるが専門的になってしまう。後者は、中国朝鮮族、中央アジアの高麗人、在米コリアン、在日韓国・

朝鮮人の文化を展示することになり、これら諸地域の研究と標本資料の収集を進めなければならない。

この二つのコーナーに関する研究と収集が進展するまで、「現代文化：スポーツ文化」と「伝統的工芸」というコーナーで代替させるが、近い将来に当初の構想にそった展示にしたいと考える。

8. おわりに

上記の二コーナーの展示が完成されたからといって、この展示が文字通り常設化されるわけではない。めまぐるしく動く民族文化に対応して展示を変化させていかなければならない。

今回の展示替えにあたって、その技法であげた、1)「みんなく電子ガイド」の利用、2)パティオでの酒幕を使った「対話の場」、3)体感展示は、いずれも「朝鮮半島の文化」展示だけで半日以上を過ごしてもらえるようにという意図があつてのことである。

最後に、新しい展示をオープンする時期にあわせて、展示される側、すなわち韓国人から展示に対する評価をうけるシンポジウムを開催する予定である。これについては別稿で報告することにする。

参考文献

栗田靖之

1999 「『みんなく電子ガイドシステム』の開発」『民博通信』85、pp.39-50
国立民族学博物館

1982 「国立民族学博物館における展示の基本構想」増刷版
祖父江孝男

1984 「東アジア（朝鮮半島の文化）展示」『国立民族学博物館十年史』

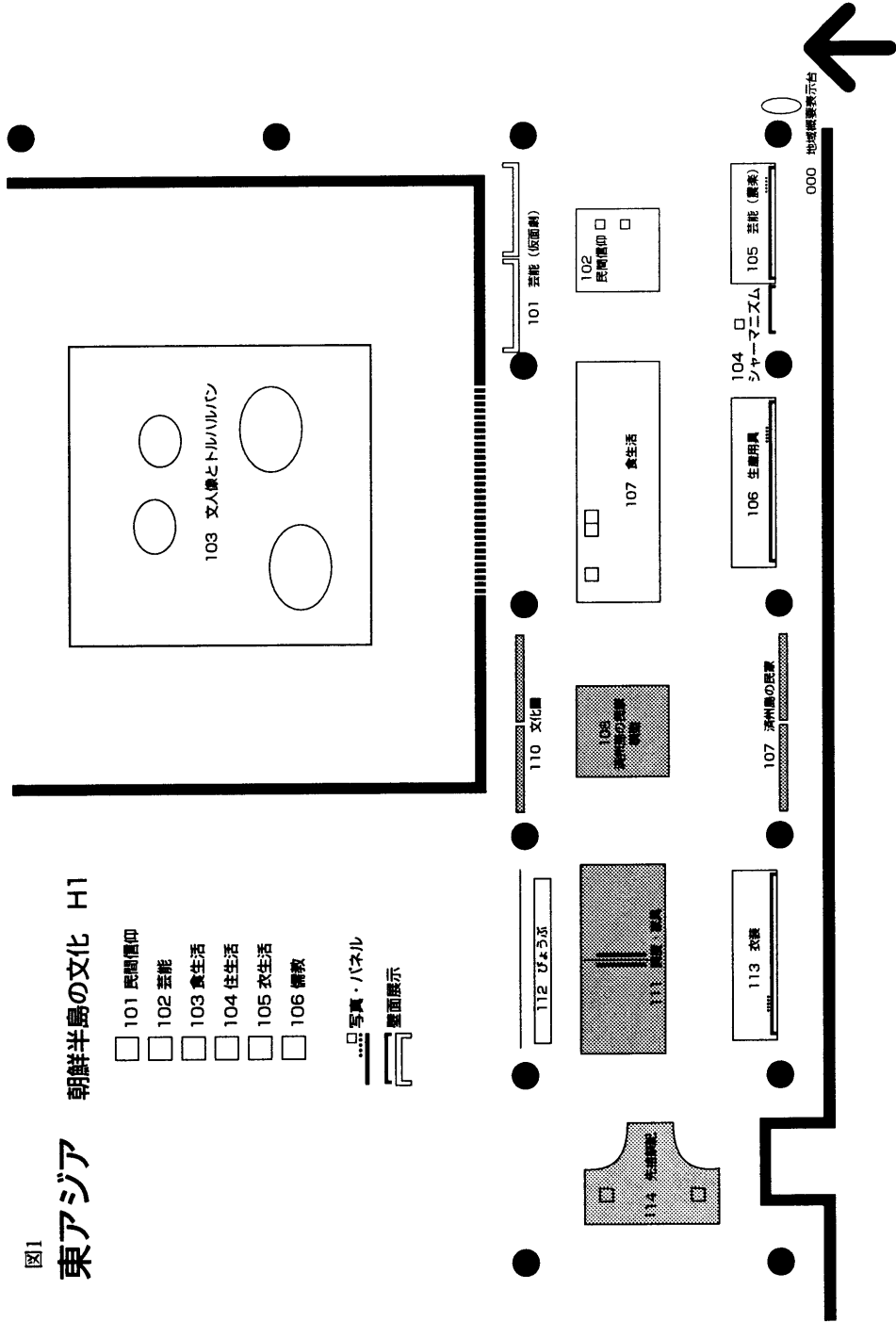


図2 東アジア

朝鮮半島の文化 H1

- ☐ 101 民間信仰
- ☐ 102 芸能
- ☐ 103 食生活
- ☐ 104 住生活
- ☐ 105 衣生活
- ☐ 106 儒教

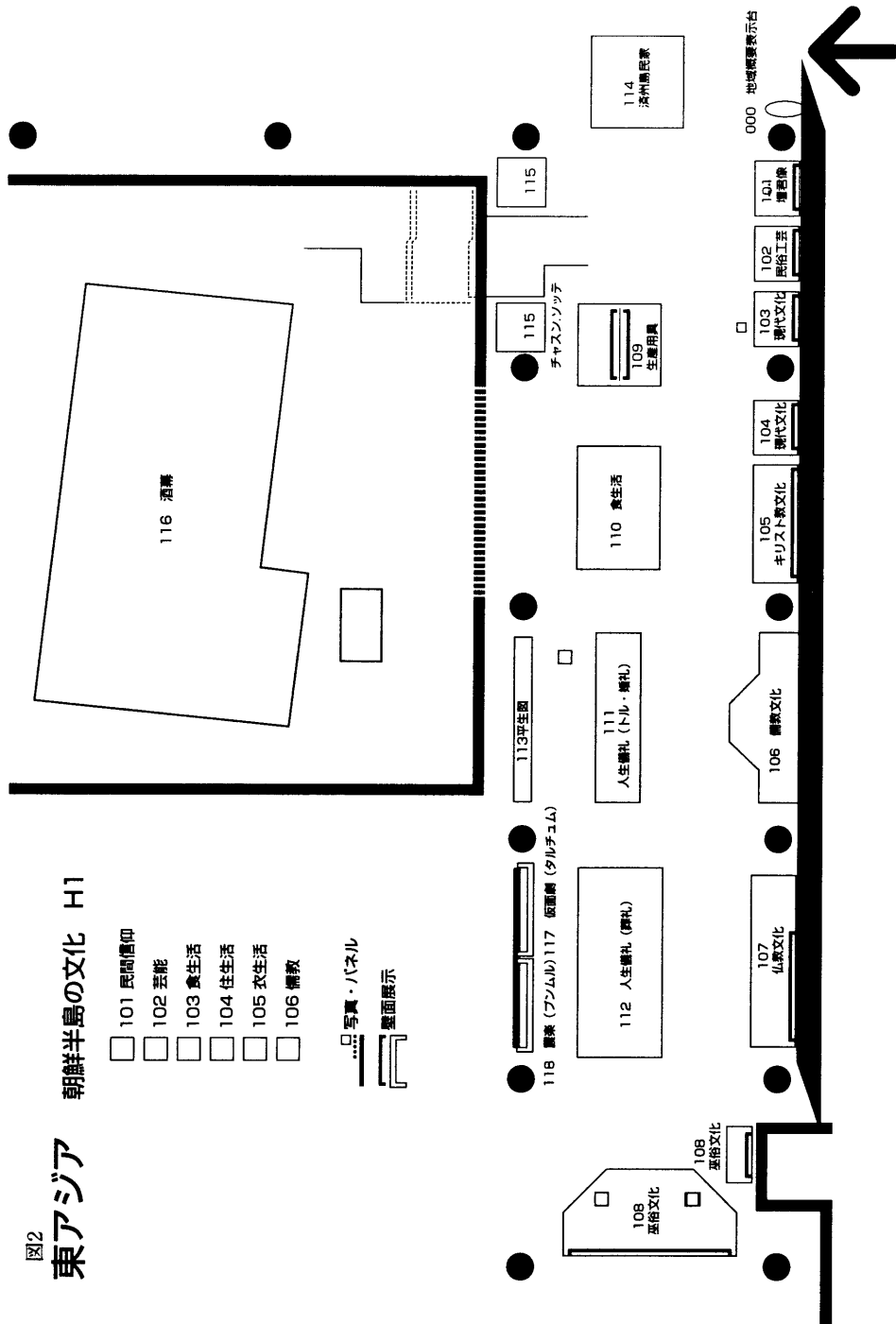


表1：共同研究会メンバー

網野房子	専修大学・法学部	専任講師	民間信仰
伊藤亜人	東京大学・総合文化研究科	教授	全般
岡田浩樹	甲子園大学・人間文化学部	専任講師	仏教
川上新二	國學院大学	講師	民間信仰
韓 景旭	西南学院大学・社会学部	助教授	中国朝鮮族
金 巴望	高麗美術館研究所	研究室長	美術
佐々木史郎	宇都宮大学・国際学部	教授	住・民家
嶋陸奥彦	東北大学・文学部	教授	儒教
志村哲男	大阪芸術大学・芸術学部	講師	芸能
鈴木文子	島根大学・教育学部	助教授	漁村
須藤 護	龍谷大学・国際文化学部	教授	民具
祖父江孝男	放送大学・教養学部	客員教授	全体総括
出口晶子	関西外国語大学・国際言語	助教授	船
野崎充彦	大阪市立大学・文学部	助教授	道教、文学
原尻英樹	放送大学・教養学部	助教授	在日、在米
秀村研二	明星大学・人文学部	助教授	キリスト教
本田 洋	東京外国語大学・A A 研	助手	農村
朝倉敏夫	民族社会研究部	助教授	食文化、全般
重松真由美	民族文化研究部	助手	巫俗
吉本 忍	民族文化研究部	教授	織機
李 仁子	C O E	講師	在日
桜井哲男	阪南大学	併任教授	音楽

表2: 展示コーナーごとの展示内容

<歴史と文化>

101 イントロダクション（韓国文化を象徴するもの）：1面

- ・檀君肖像画：朝鮮半島五千年の歴史を象徴
- ・塙

102 民俗工芸：1面 →海外のコリアン

- ・タコ、ハナゴザ、ポクチョリ

103 現代文化（子ども部屋と台所）：1面

- ・千文字・ハングル練習帳、タイプライターなど：韓国の文字についての展示もかねる。
- ・キムチ冷蔵庫、浄水器、プラスチックバガジ：現代都市アパートの生活を展示、浄水器は薬水信仰との関係も指摘する。

104 現代文化（スポーツ）：1面 →韓国における日本文化（植民地時代の文化）

- ・プロ野球、サッカー、跆拳道のユニフォーム、シルム

105 キリ基督教文化：2面

- ・カトリック：家庭の祭壇
- ・プロテスタント：多くの宗派
社会問題としてのキリ基督教にならないように留意する。

106 儒教文化

- ・祭祀床（既存）：これまでの展示と逆向きに祭祀床を置き、スクリーンによって祭祀者を表現し、来館者が被祭祀となるように展示する。
- ・誌石
- ・両班の調度品（キセル、筆など）（既存）

107 仏教文化：3面

- ・寺
- ・民俗仏教
- ・現代の仏教

108 巫俗文化：韓国人の感情、喜怒哀楽を表現したい。

- ・クッパン（シャマンの儀礼）

<食生活>

109 生産用具（既存）

110 食生活（既存）

- ・食膳
- ・キムチのかめ：木製のキムチかめ
- ・葉棚

<衣生活>

111 人生儀礼

- ・トル（既存）
- ・婚礼（既存）

112 人生儀礼

- ・喪礼（喪輿、喪服）

113 平生図（既存）

<住生活>

114 済州島民家模型（既存）

115 チャンスン・ソッテ（既存）

116 酒幕・チャントクデ

<芸能>

117 仮面劇（既存）

118 農楽（既存）